論文

前近代史のなかのコンタクト・ゾーン

——Finbarr B. Flood 著 *Objects of Translation* をめぐって

稲葉　穣

1　はじめに

共同研究班「複数文化接触領域の人文学」がスタートした2006年の6月，筆者は「複数文化接触領域としての古代アフガニスタン」と題する講演を行った。これまでの，特に日本における前近代アフガニスタン研究の成果と今後の課題について簡単にまとめたうえで，結びにかえて次のように述べた。

> 複数文化接触領域について考えるとき，そこに見いだされる文化要素を，いわば要素還元的に分析するという手法では，辺境は辺境のままであり，融合文化は単なる複数要素の足し算であるに過ぎなくなります。そうでないやり方とは何か。これは歴史研究や宗教研究の枠組みを超えて考察し，開拓していかなければならない問題なのでしょう［稲葉 2007：15-16］。

自らの言葉を引用するというのは想像以上に気恥ずかしいのだが，さらにあらためて見ると，いかにもナイーヴな言明でなおさら恥ずかしい。それでも，ここで筆者が拙いながらも表現しようとしていたのは，前近代歴史研究において複数文化接触という事象をどのように扱えばよいのか，という問題意識なのである。特に当時筆者の頭にひっかかっていたのは，この「要素還元的」分析といわば総合的記述のどちらをとるべきなのか，あるいはとり得るのか，という問題であった。結論から言えば，4年前に述べたような「そうでないやり方」をうまく見いだせないまま，時間のみが過ぎてきた。言うまでもなく我々は原理的に「過去の総体」を復元することはできない。過去にあった出来事の大部分は消え去ってしまい，我々が現在目にすることができるのは，記録に残されたり，あるいはなんらかの痕跡を残したごく一部であるから，我々が過去の歴史を考えるといっても，あくまでそれらに基づく内容に限られる。そのうえ，我々が過去の何ごとかを記述しようとする際には，その限られた痕跡の中で，さらに選択的にならざるを得ないのである（ポパー［1961：121, 1980：246-249］参照）。ただ，それでも我々はたとえば過去の特定の社会のあり方が「全体としてどうだったのか」という問いを発し続け，それを理解しようとする試みを続けてきた。歴史上生じた特殊な「出来事」よりも，ある特定の社会に固有の，持

INABA Minoru　京都大学人文科学研究所

続する構造あるいはパターンを探り当て，それらの構造の相互関連を明らかにすることによって「全体としての社会のあり方」を解明しようとしたのが，いわゆる社会史研究であったことはいまさら言うまでもない（ルゴフ［2009］，斎藤［1993］参照）。しかしながら，たとえば前近代のアフガニスタンという地域を対象にした場合，このような構造やパターンを研究することは実は全く容易ではない。それはこの地域が南アジア，西アジア，中央アジアという異なる文化世界，歴史世界の狭間に位置するという，まさにその地理的条件によると言っていいだろう。それによってそれぞれの文化世界の中心地で書かれた史料にこの地域が常に辺境として現れ，結果として十分な情報が蓄積されていない，という点についてはやはり4年前に述べたとおりであるが，さらに踏み込むならば，上記の三つの地域が，政治，宗教，経済など，様々な「構造」を含む，いわば「文明」という強い枠組みを持っていたと考え得るのに対して，それらの狭間に位置する地域の社会がどのような構造を持ち得たのか，という点においても我々の知見は極めて限られているのである。言うまでもなく，人口統計，家族構成，生産活動などなど，ある意味で定量化し得るデータを用いて社会構造を探ることが社会史研究の一つの特徴であるのだが，そのようなデータはこの地域については，おそらくごく最近まで得られていない。一方20世紀以降本格化し，精力的に行われた考古学調査は一定の成果をあげたが，それが定量的データとして真に利用し得るようになる前に，残念ながらこの地域における調査活動は不可能になってしまった。

ところが最近，イスラーム美術史家であるフラッド Finbarr B. Flood が発表した，*Objects of Translation : Material Culture and Medieval "Hindu-Muslim" Encounter* に，この方法的問題を解決する糸口が含まれているように思われたので，以下それを簡単に紹介してみたい。

2　Translation, transformation, transculturation

一言で言えばフラッドの研究は，境界を越えて移動するモノ material object と人 agent，その移動の意味，移動によって変質するモノや人のアイデンティティ，機能，さらにその変質のあり方 translation / transformation を丹念にたどり，9世紀から13世紀，すなわちアラブによる初期のスィンド征服から，ゴール朝およびデリー・サルタナット初期までの間における「ヒンドゥー」と「ムスリム」の相互関係が，従来想定されていたよりもずっと複雑かつ双方向的（著者自身は「多方向的 multidirectional」とする）であることを明らかにしようとするものである。著者は，アラブあるいはムスリムが南アジアに進出し支配権を確立していく過程を，「文化接触 cultural contact」，「文化翻訳 translation」と「文化変容 transformation」，およびそれを包含するトランスカルチュレイション transculturation という概念によって分析し，様々な事例の中にこれらがどのように観察されるか，それぞれの事象がどのような背景を反映するのかを論じるのである[1)]。たとえば9世紀にサッファール朝の王によってインドから掠奪された偶像が，戦勝記念としてバグダードに送られた後，カリフから臣下への報奨の一部として下賜された点に見えるよう

に，新しい文化環境の中でモノに新しい意味が付与され，流通した例［Flood 2009：31］や，バグダードにおいて発行された北インドの伝統的図像を持つ貨幣の存在に見える希少性とそれが持つ意味［25-26］（以下ページ番号のみが示される場合はFlood［2009］のそれを意味する），あるいは，インド亜大陸において初期，ムスリムの拠点となった都市マンスーラ[2)]において，ムスリム住民がバグダードと同じように装っていた一方で，支配者層はインドの王達と同じような服装をしており（文化的異装　cultural cross-dressing），その支配者がアラビア語の銘文を刻みつつ，インドの伝統的な秤量体系に従った貨幣を発行していたという例［52］に見える混淆性 hybridity，北インドにおいてつくられた初期のイスラーム建築に見えるインドの伝統的（すなわち非イスラーム的）意匠や装飾技法の採用と，アフガニスタンにおいて13世紀に建造された極めてインド的な技法と材料を用いるモスクの存在から導き出される，双方向的なトランスカルチュレイションの存在［164, 208-209］，などである。もちろん彼が対象とする事象は極めて多岐にわたっており，これらはそのごく一部分にしか過ぎない。その意味ではこの書物自体，彼が「ヘテロトピア」として持ち出す近現代の「博物館」の性格［252］に共通するものを持っていると言えるかもしれない[3)]。

ところで彼の書物において極めて特徴的なのは，このような現象の分析や理解のために，可能な限り新しい理論的枠組みを援用しようとする姿勢である。たとえば，上掲の文化的異装の例を模倣 imitation やミミクリとして説明し，ヤーコブソンの翻訳理論やラトゥール，デリダの議論を紹介しつつ「翻訳」の持つ「文化変容的」機能を重視する点，あるいは北インドの初期イスラーム建築をブリコラージュとして捉え，集合的記憶を集積する場所としての機能をそこに観察し，さらにはアフガニスタンにインド風建築を造営した具体的工人達の移動性 mobility と，彼らが携行したハビトゥスとしての技術とコンセプトを浮き彫りにする，といった点などにその姿勢が明確に見て取れる。フラッドは，以下のように指摘している。

> このような理論的なアプローチは近代のコロニアル文化やポスト・コロニアル文化との関連の中で発展してきたのであり，その結果，前近代を研究する歴史研究者達は，その含意するところのものを評価し，利用するのに後れを取っている［8］。

また，次のようにも述べている。

> 本書の副次的な目的は，前近代研究に関する経験的手法による研究と理論的枠組みの間の（しばしば明示される）境界線をどうにか超えることに貢献し，前コロニアル期，コロニアル期，およびポスト・コロニアル期の歴史と歴史記述に興味を持つ人々の間に対話を作り出そうとすることなのである［14］。

すなわち，このような議論を通じてフラッドは，ポスト・モダン，ポスト・コロニアル，グローバリゼーションに関わるより新しい理論的枠組みを積極的に援用し，それによって

前近代社会研究と近現代社会研究の間を架橋する試みを行っているのである。

別の言い方をするなら，近現代社会，特にコロニアル期およびポスト・コロニアル期社会を読み解くための概念装置を前近代社会の分析に積極的に利用することで，逆に前近代社会が近現代のそれと同様にハイブリッドなものであり，様々な理由や契機をともなって人やモノが移動する場であったことを描き出そうとしているのである。もちろん個々の論点やフラッドの提示する枠組み自体，今後の研究の中で様々に批判されたり，深化されたりするであろうが，イスラーム世界とインド世界の間における最初期のトランスカルチュレイションという現象をこのような方法で扱うことができる，と示して見せたこと自体がすでに，フラッドの大きな貢献であり，我々の今後の研究において常に参照されるべきものであることに疑いはない。

3　接触領域 frontier / contact zone

さて，本誌のテーマでもある複数文化接触という観点から注目しておくべきなのは，彼がトランスカルチュレイションの生じる場としての接触領域 frontier / contact zone をどのように定義あるいは想定しているか，という点である（フラッドの書物にも“contact zone”という語は数回現れるが，フラッドはどちらかというと，接触の生じる社会的局面に主にこの言葉を使用している）。

フラッドは次のように述べる。

> それゆえ，我々が扱おうとするのは，限られた（あるいは区切られた）空間というよりも，その縁辺で交差し，“zone boundary”あるいは“transfrontier”を形成するような文化的政治的権威の影響圏であり，そこにおいては文化的政治的権威の及ぶ範囲がオーバーラップし，また好戦的な統治者か，移動する商人達，巡礼達，旅行者達によって，絶え間ない交渉が行われるのである［24］。

ここで「絶え間ない交渉 continuously negotiated」という表現は，たとえばターナーやラティモアによる古典的なフロンティア研究，すなわちフロンティアというのが単なる「境界線」ではなく，政治的，経済的，社会的，あるいは環境的過程を含むプロセスとして考察されるべきだという立場を想起させる（Turner［1921］，Lattimore［1962：469-491］参照）。当然そのようなフロンティアは地理的空間のみにとどまらず，社会的接触領域を内包することになるし，同時にまた現代の国境線などと異なり，地理的空間という実態を有しつつも，時と条件によって様々に移ろい得るようなプロセスとして考察されるべき対象となる。

しかし，プロセスの面にあまりに強意を置くことについて，フラッドは慎重である。

> しかしながら，動的で交雑的 heterogenous な文化システムを具体的なものと見なして扱うことの危険性を認めつつも，我々はプロセスだけではなく，出来事 event に

ついて考えなければならない。とりわけ，既存の社会的政治的秩序の突然の遷移が，急激な密度や規模の変化をともなう循環や接触の新しいパターン，あるいは遭遇と交換に関わる既存のパターンの前提条件を産み出すようなあり方を認識する必要がある［5］。

言うまでもなく，ある程度長期間にわたるプロセスを，なんの分節も無しにそのまま描き出すというのは現実的に不可能なのであり，フラッドは分析のためには，そのプロセスの意味を分節化するような出来事に着目せざるを得ない，と見ているのである[4)]。

4　文化と本質主義

このように，地理的空間と社会空間，あるいはプロセスと出来事の両方にバランス良く注意を払うというフラッドの姿勢は，いわゆる「本質主義」に関わる問題においても明確である。冒頭に引いた筆者の言明も，南アジア，西アジア，中央アジアにそれぞれ特有の文化があることを自明の前提としたものとなっているのだが，それらの文化は一旦「文化」という枠組みに放り込まれると，均質な内容を持ち，無名の個によって実践される営みであるかのように扱われ，文化接触という現象も「文化」が主語として描かれがちである。しかし，実際にはそれらの文化の内実は多様であり，常に移ろうプロセスのうちにある。フラッドは，ポロック Sheldon Pollock による次のような批判を紹介する。

確かなことは，トランスカルチュレイションの過程が人々に，ある方法で語るような力を与えるとするなら，それは別の方法で彼らが語ることを不可能にする，ということである。そしてそのような不可能さに関する意識の増大が，「再地方語化 re-vernacularization」のための一つの条件なのであろう。しかしこのような見方の中には，「文化」が，単一の思潮を持つ均質的で独占された資本であるとする，非歴史的，本質主義的見解が潜んでいるのである。事実はそうではなく，伝達される文化的なモノはすでに自身ハイブリッドなものであり，伝達する側と同様，受け手側の文化も常にすでに動的過程の中にあり，いかなる本質をも持たないのである。それゆえトランスカルチュレイションというのは誤解を招く呼称 misnomer なのであり，それは総ての文化生活が持つ真にして常態のあり方なのである。そうして「地方語」も「地方語化」もそれ自体，何か「真の」ものであるのではなく，不断の変化の過程の中での別の不安定な段階に過ぎないのである［Pollock 1996 : 246］。

そのうえでフラッドは，それでも研究の基礎として，ある程度はそれぞれの「文化」を前提と（あるいは仮設）することは必要だと見ているのである。彼が，古典的な本質主義的立場と，本質主義的「本質主義批判」の間のどこか（おそらく随分と後者より）に立ち位置を定めているというのは，次の記述からもよくわかる。

アフガニスタンとインドにおけるゴール朝のモニュメントに同時に観察し得るこのような媒介，交渉，翻訳のプロセスは，二つの固定された文化の単なる混合や，寺院とモスクの間での一方向的な移行によって生じたのではなく，そこにおいて記号 signs と意味 meanings が流用され，翻訳され，再歴史化され，新たに読み直されるような動的な条件によって引き起こされたものなのである［262］。

引用中，ゴール朝時代のインドとアフガニスタンのモニュメントが「二つの固定された文化」の間の単なる混合ではない，とされつつも，そこにはやはりある種の「文化」が想定されているからである。このことはしかしながら，文化接触，文化翻訳，文化変容などなどの現象を考察するためには結局「文化」を基礎に置かざるを得ないという方法的制約から，我々は逃れることができない，という点を勘案するなら十分に理解できる。要するにフラッドが批判するのは，何らかの文化の枠組みを想定することそれ自体ではなく，その枠組みを固定化し，その枠組みの中が均質で理想的なモノによって満たされると想定することであり，「前近代の人間のアイデンティティが強く関与するようなモノは，エイジェンシーや流通，使用ではなく，本質，形式，構造的なアイデンティティによって満たされている」［265］とするような本質的・純血主義的認識なのである。

以上のような立場からフラッドは「トランスカルチュレイションという用語は，文化同士の接触のうちにおいて展開される変容の複雑な過程を示すものである」［9］とし，そのような複雑な過程を，具体的なモノの流通という現象の周囲に読み込もうとしているのである。

5　「文化史的事実」

遅塚忠躬は近著『史学概論』の中で歴史研究の方法論を述べ，歴史研究が対象とする「事実」を三つに分類する。すなわち「構造史的事実」，「事件史的事実」，「文化史的事実」である。「構造史的事実」とは遅塚によれば，ある社会の構造――長期的に変容する構造――に関わる事実で，たとえば人口動態や土地所有動態など，その社会において繰り返されるある種のパターンを読み解くうえで利用できるものであり，一方「事件史的事実」とはそれに対して一回限りの現象としての出来事に関わる事実である。遅塚は，この二つを橋渡しするものとして「文化史的事実」を想定し，集団心性，政治文化，社会的結合関係に関するものがこれにあたるとしている。ただし実際には「文化史的事実」は，その全体像を客観的に把握するのがしばしば困難なものであり，それゆえ断片的に現れる表象や言説を手がかりに，その背後にある様々な文化史的状況を叙述するのが，文化史研究である，と措定するのである［遅塚 2010：133-66］。

遅塚の議論は極めて明快かつ周到に展開されており，その議論の枠組み自体についての異論はあり得ようが，筆者は教えられるところが非常に多かった。そうして特に興味を引かれたのは，文化史研究が，構造史研究と事件史研究の橋渡しをする，という遅塚の切り分け方である。このことは，非ヨーロッパ世界の前近代史研究と近代以降（あるいは世界

システム登場以降）の研究，およびそれぞれの主たる傾向と，ある意味で対応しそうに見えるからである。冒頭に述べたように，前近代アフガニスタン地域の社会に関して，その構造的特徴を明らかにできるような定量的データを我々はほとんど持っていない。それに対して，散発的にではあるが，我々はこの地域で起きた色々な事件に関する興味と研究成果をそれなりに有している。

このような地域と時代の研究をさらに深め，その社会の特徴を世界史的な文脈に投下するために，理想的なのはもちろん社会構造の特徴を明らかにすることなのだが，上述の理由でそれは当面難しい。しかし，事件史研究と構造史研究の間隙（しかも相当に幅広い間隙）を埋めるものとして，表象や言説を主たる研究対象とする文化史研究があるとすれば，それらをテクストとして読み解くための多様な角度からの検討に，他地域，他時代の研究において培われあるいは見いだされた様々な理論的枠組みや概念装置を利用することが必要となる（背後の構造を想定することによって表象の意味が明らかになる，と遅塚は述べる）。前述のとおり，フラッドの研究が行っているのはまさにこの作業なのである。ただしもちろんフラッドの枠組みと遅塚の整理が完全に対応しているわけではない。定量的データを用いて社会の長期的動向を明らかにする，という作業のかわりに，フラッドが行っているのは，文化翻訳，文化変容，文化横断といった現象が生じるパターンを読み出すことによって，そのようなプロセスが生じる場としての地理的・空間的（時には文化的）境界領域の有様を論じることなのである。

このことは，比較史研究の可能性を考慮したときにさらに大きな意味を持ち得るだろう。やはり4年前の講演において，筆者は，アフガニスタン地域を古来通過する遠距離交易の主要交通路の存在が，この地域の歴史理解に欠かせないことを指摘したが，そこでも道の上で具体的に何が生じていたのかについて，我々が断片的にしか知らないことに注意を喚起し，その問題を解くための鍵は他地域あるいは別時代との「比較史」にあるのではないかと述べた［稲葉 2007：10］。比較史については現在では一般的な手法となり，専門の学会も存在するなど，ここで持ち出すのは随分と「今更」な感もあるが，実際にそれを行うには比較のフレームワークを適切に抽出することが望ましいし，必要ですらある（斎藤［1997：29］参照）。残念ながら比較史関連の研究に筆者が通暁しているわけではないが，先に触れた，社会史研究の基盤を提供する定量的データに基礎づけられた構造やパターンが，そのフレームワークの最も重要なものの一つであると言ってもそう過たないだろう（遅塚［2010：44］参照）。これと並んでしばしば研究されるのが，比較文化，すなわち特定の社会の集団心性であるとか，それと強く関連する芸術表現のあり方などに関する比較研究である。定量的データを利用できない，前近代アフガニスタンのような地域で，行い得る最も有望な比較研究はまさにこれであろう。その意味でフラッドの研究はその道を大きく示したのみならず，いわゆる文化世界同士の比較研究ではなく，そのような文化世界の狭間，フロンティアの社会においてどのような現象が生じたのか，について研究するための準拠枠を提示しているという点でも極めて貴重であると考える。[5)]

6　おわりに

以上，フラッドの書物によって喚起された興味のままに述べてきたが，概括するなら，フラッドの研究は多様な事例を用いて，境界領域において，あるいは境界領域を越えて生じた文化接触と変容のパターンを描き出そうとしたものである。ただし，一方でその内包する多様性は，個々の事例が別の文化の文脈の中に流用され，翻訳され，変成される詳細な過程の議論をやや減じてしまっているうらみもある。フラッドの議論の枠組みを参照しつつ，特定の事例をより詳細に検討することによって，このような研究方法の有効性について具体的に検証することが可能になるだろう[6)]。

注

1）　これらの概念についてはバーク［2009：156, 240］も参照せよ。トランスカルチュレイション transculturation という言葉を最初に用いたのはキューバの人類学者オルティス Fernando Ortiz だとされるが［Ortiz 1995（1940）］，プラット Mary Louise Pratt はこれを，コンタクト・ゾーンの中で実際に生じる重要な現象として位置づけた［Pratt 1992］。

2）　8 世紀にインダス下流域を征服したアラブ・ムスリムが建設した植民都市。現在のパキスタン・イスラーム共和国南部，ハイデラバードから北北西70 km ほどにその遺構が残っている。

3）　もちろんここで，フラッドの書物がフーコー的な意味でのヘテロトピアだと言っているわけではなく，単に主題と素材の多彩さと説明の豊かさを博物館に譬えているだけである。

4）　この点についてはたとえば，バーク［1996：274］を参照せよ。

5）　フラッドが援用するポスト・モダン，ポスト・コロニアルな概念用語は，イスラーム教徒による大征服と支配，という現象を，いわゆる植民地帝国主義の時代と比較して考えることの足がかりにもなる。このようなアプローチは，最近のクローン Patricia Crone の研究［Crone 2006］にも見られ，今後さらなる展開が期待される。

6）　この点に関しては別稿［稲葉 2011］において試論したので，ついて参照されたい。

参考文献

稲葉　穣　2007「複数文化接触領域としての古代アフガニスタン」『Contact Zone』1：1-17。

――――　2011「ヘラートの「カーマ・スートラ」――中世アフガニスタンにおけるトランスカルチュレイション」田中雅一・稲葉穣編『コンタクト・ゾーンの人文学 2　Material Culture ／物質文化』晃洋書房，pp. 3-37。

斎藤　修　1993「「全体」史とディシプリンとしての社会史と」『社会経済史学』59 (1)：183-192。

――――　1997『比較史の遠近法』NTT 出版。

遅塚忠躬　2010『史学概論』東京大学出版会。

バーク，ピーター　1996「事件史と物語的歴史の復活」P. バーク編『ニューヒストリーの現在』（谷川稔他訳）人文書院，pp. 273-289。

――――　2009『歴史学と社会理論　第二版』（佐藤公彦訳）慶應義塾大学出版会。

ポパー，カール・R. 1961『歴史主義の貧困』（久野収・市井三郎訳）中央公論社。

――――　1980『開かれた社会とその敵：第二部　予言の大潮』（小河原誠・内田詔夫訳）未来社。

ルゴフ，ジャック　2009「歴史学と民族学の現在」二宮宏之編訳『歴史・文化・表象　アナール派と歴史人類学』（岩波モダンクラシックス）岩波書店，pp. 15-45。

Crone, Patricia 2006 Post-Colonialism in the Tenth Century Islam. *Der Islam* 83：2-38.

Flood, Finbarr B. 2009 *Objects of Translation : Material Culture and Medieval "Hindu-Muslim" Encounter*. Princeton & Oxford : Princeton University Press.

Lattimore, Owen 1962 *Studies in Frontier History : Collected Papers 1928-1958*. London : Oxford University Press.

Ortiz, Fernando 1995 *Cuban Counterpoint : Tobacco and Sugar* (tr. by H. de Onís). Durham & London : Duke University Press (スペイン語原版出版は1940年).

Pollock, Sheldon 1996 The Sanskrit Cosmopolis, 300-1300 : Transculturation, Vernacularizasion, and the Question of Ideology. In J. E. M. Houben ed. *Ideology and Status of Sanskrit*. Leiden : E. J. Brill, pp. 197-247.

Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. London & New York : Routledge.

Turner, Frederick J. 1921 *The Frontier in American History*. New York : Henry Holt and Company.